km近いものであった。この中軸線は北京城平面構造の中心であり、皇帝の住まいである宮廷の全城内における中心的地位を際立たせて、帝王の都としての設計思想を体現していた。中軸線及びそれによって作り出された東西対称の構造が北京城の平面景観における最大の特色である。

清朝の統治者は明朝の北京城を完全に引き継いで使用し、何の変更も加えなかった。紫禁城の中ですら、建築物の再建や修理、局所的な小さな範囲内での改造、増築作業を行ったのみであった。しかしながら、清朝は満州族と漢族の分離政策を採り、満州族は内城へ、漢族は外城へ住まわせた。これが原因で、清朝での北京内城、外城の社会生活上の特色は異なるものとなった。

その他、清代はかつて膨大な財力を投入して北京北西郊外に皇帝一族のための大規模な景勝地を開発し、空前の規模の非凡かつ華麗な離宮建築群を造営したのである。

【コメント】

金坂 清則

唐暁峰教授の発表は、元から明の帝都、次いで明から清の帝都となることによって、北京（北京城）が時の権力者によってどのように改変され、その都市プラン・都市構造がいかに変容したか、いわば都市プラン・都市構造の持続と改変・変容の実態を、歴史的事実に即して、歴史地理学・都市地理学的な観点から具体的に示したものである。的確な史・資料の活用と風水や都市制度への着目（当然のことではあるが）に加えて、コスモロジー論のような比較的新しい視座の取り込みを行うことにより、オーソドックスでありながら新しさもある、完成度の高い発表になった。図像資料を提示しつつ行われたために研究内容が大変わかりやすかった点と共に、高く評価される。

評者は、このような評価の上にたって、本発表に対するコメントを、①考え方ないし理論、②資料、③外国人の研究という、相互に重なる３つの側面から行った。

①考え方ないし理論　唐教授は明・清の北京城の都市プラン・建築の中に民族の哲学がいかに具現されたのかという観点にたって本発表を結んだ。このまとめ方はもちろん正当なものである。ただ、帝都北京城の特質を、比較の視点を導入することによって、少なくとも中国都市全体の中で位置づけるということも重要だろう。都市史的に見た時の中国の都市の多様性や、G.W. Skinner・斯波義信らによって体系的に論じられた都市の階層性が重要な論点になるからである。また、このような比較の視点の導入によって明・清北京城の特質とその歴史景観の今日的価値がより明確になりそれを都市整備に生かすことができると考えられるからである。第２に、都市史・建築史学や歴史学（日本の場合に比べれば関係がより強い）など隣接分野からの北京の都市史研究についての唐教授の見解の提示があったならば一層よかったと思われる。学問分野間の越境・交流とその中での歴史地理学の独自性の追求が、本研究のようなテーマにあってはとりわけ必要であるからである。さらに第３点として、世界で広く注目を集めてきている都市の歴史的景観の保全の問題が北京にあっても重要かつ緊急の課題であることからすれば、その前提として、北京城の歴史的景観が論理的にはどのように評価されるものなのかを研

究の帰結として示すことも大切であろう。大変難しいことではあるが、中国の地理学(者)の場合には、都市の開発整備の問題にも積極的に関わってきているし、持続的発展ということが世界の基調になり、現存する価値あるものの保全と開発との調和についてのより深い思考が諸学に求められているからである。

②資料　次に資料についていうと、図像資料の一層の発掘と活用によって本研究はより発展すると考えられる。その１つは中国のみならず日本など海外にも伝存する中国製の絵図・地図であるが、それと共に重要なのは、欧米人の手になる旅行記・滞在記その他の文献資料および写真資料である。これらには、都市の平面図的特徴に重点をおきがちな地理学者が見落としがちな都市の特徴も示されているからである。また、客観性と同時に作者の思想や考え方、見方や主観性が投影されているという点でも興味深いからである。臨場感にみちた描写や表現を積極的に取り込む姿勢こそは静的(スタティック)になりがちな地理学的研究の問題点を打破することにもなる。写真について一言すれば、『旧京大観』や『旧京史照』のような発表者もご存じの写真集に収められた写真よりも古い、F. ベアト（Felice Beato）が第二次アヘン戦争下の1860年に撮影した写真がとくに貴重であるが、そのほかI. バード（Isabella Bird, Mrs. J. F. Bishop）の写真集にも本発表に関係する写真が若干ある。最初、1862年にアルバムとしてまとめられたベアトの写真は、近年ではD. ハリス（David Harris）によって編纂・出版されている（David Harris ed.. *Of Battle and Beauty: Felice Beato's Photographs of China,* Santa Barbara Museum of Art, 1999）。

③外国人の研究　最後は、評者自身これに詳しいわけではないが、日本を含む外国人の中国都市や世界の歴史的都市の都市構造・都市プラン研究の成果の摂取もあればよりよいということである。尤もこれは、外国人の歴史地理・都市地理研究者が、中国の歴史的都市やこれに関する中国人研究者の研究成果にもっと通じなければならないということでもある。そのような機会の提供という点で、本シンポジウムも北京を対象とした本発表も誠に有意義であった。

（京都大学大学院 人間・環境学研究科）